

---

# 真祖の乙名と聖杯戦争

如月由真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真祖の乙名と聖杯戦争

### 【Nコード】

N1279U

### 【作者名】

如月由真

### 【あらすじ】

それは遙か昔のこと。月の頂点に立っていた者が創り上げた己の後継。自我が強すぎて自身をプログラムできなかった最愛なる失敗作。それから時は流れ、“長老”となったそれはある国のある都市に入り込む。

毎夜行われる願望機を巡る殺し合い。哀切を含む咆哮。傲慢に突き進む王の凱旋。

最愛なる失敗作は夜を駆ける。傍らに、双槍の使い手を侍らせて。

## プロローグ（前書き）

ゲーム未プレイの作者の知識は結構浅いです。まだまだ未熟者なため、誤字・脱字・奇怪な文法も多々あります。

純粋なFateファンの方にはご不快な面もあるかもしれませんが。その恐れのある方はそっと目を逸らし、この作品の存在を記憶から抹消し、どうぞお戻り下さいませ。

## プロローグ

吐く息が白濁して、闇に溶けていく。彼女が肩に羽織った緋色のケ  
ープも、真冬の夜の冷氣からは守ってくれない。

月が白く霞んでいる。ぼう、と睡魔が侵してゆく脳はうまく働かな  
くて、それを払うために彼女は大きく首を横に振った。

さあ、ようやく時間だ。

暗闇でもわかるほどに白く柔らかなてのひらに、プツリとナイフを  
浅く突き立てる。

じん、とした痛みのもと、すぐに血が溢れ出したてのひらを注視し  
てから、薄く氷結を始めた地面に手をかざした。

血が土に流れ落ちて染みていく。いのちが地に廻る<sup>めぐ</sup>。

「閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じ  
よ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。繰り返すつどに五度。 た  
だ、満たされる刻を破却する」

誰そ彼と彼は誰の瞳を伏せ、唇を震わせ、事前に教えてもらった呪  
を咏う。

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべ  
に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

さらりと月色の、腰に流れる髪が後ろに浮遊する。

「 誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総て  
の悪を敷く者」

身体を、自然の生命が駆け巡り、蹂躪する。　　しかし、彼女の唇には笑みが浮かんでいた。　　そう、この感覚こそが、術式が機能している何よりももの証。

「　　汝三大の言魂を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ　　！」

敷かれた陣に逆巻く風と光。  
眼を灼く閃光にも開いた目を閉ざさずに、身を圧する風にも身じろがずに。ただ、それらがおさまるのをひたすら待つ。

やがてその光りの中心に、ヒトのカタチをした影が色をなす。

「　　問おう」

光りは緩やかに終息を迎え、それとともに影ははっきりと色を宿し、やがて彼女は静かな視線に射抜かれた。

「　　貴女が、我がマスターか」

日々の鍛練により鍛えられたスラリとした体躯。濡羽の髪。目元に  
ある一粒の黒子。

そして、両の手にはルーン文字が刻まれた鮮やかな赤と黄の槍。  
彼女の口元が、はつきりと歡喜の笑みに形を変えた。

「　　如何にも。我が現世にそなたを招いたあるじ。其の方、真  
名をデイルムッド・オディナで間違いなかるうか」

「　　是」

古きケルトの英雄。輝く貌のデイルムッド・オディナ。

誇り高きフィオナの騎士は彼女の問いに目を伏せ肯定し、深い忠義

の意を持って陣の中心に傳いた。  
差し出された白い織手を恭しく取り、手の甲　　三画の痣、令呪  
へと唇を落とす。

「サーヴァントランサー。召喚に応じ、馳せ参じました。こ  
れより我が双槍、我が忠義の全てを掛け御身を御守りすることを誓  
約申し上げる。我が今生の主よ」

彼女は服従の意を示すランサーの様子に、ようやく安堵したかのよ  
うに笑みを柔らかなものに変え、口に出す言葉からも古めかしさが  
抜ける。  
肩から力を抜いて彼に立つように指示した。

「召喚、成功してよかったわ。……実はあまり自信がなかったの。  
私に“兆し”が顕れたときなんて、なんの冗談かと思っただくらい。  
私、魔術師じゃないのに」  
「……………恐れながら。主は魔術師ではないのですか？」

主の言葉を受けて起立したランサーは、彼女の唇から照れたように  
こぼれたセリフに瞠目する。  
槍兵の身体を廻る魔力はあまりにも豊潤でみずみずしく、一流とよ  
ばれる魔術師のそれよりも遙かに洗練されている。それなのに、魔  
術師ですらないとはどういうことなのだろうか。

ランサーの戸惑いに気付いた彼女はクスクスと可笑しそうに「そん  
なに畏まらないでいいのに、」と笑い、突如、何かに気付いたかの  
ように顔をしかめて口を閉ざした。

沈黙は十秒に満たず。しかし再び場に響いた彼女の声は、やや頼り  
なげなものだった。

「ねえランサー。あなた、私を主と言ったわよね」

「はい」

「……………ええと、……………その。……………それ、私がヒトでなくとも、同じ思い？」

視線をうつろつろとあちこちにさ迷わせ、どこかためらうような声音に、漸くランサーは得心した。  
成るほど、そういうことか。

「……………主。私は貴女が人間であろうがなかるうが、立てた誓いを違えることはありません。我が槍は貴女のためにあります」

その言葉に。

彼女はゆっくり目を見開いた後、喜色満面に華咲くように顔を綻ばせ、クルリとワルツを踊るようにその場に一回転した。そしてワンピースのスカートの両裾を摘んでランサーに向かい、完璧な角度で頭を下げる。

その姿は、まるで王城の姫君。

「初めまして、神代の英雄、フィオナ随一の騎士よ。わたくしの名はアレインティシア・ブリュンスタッド。朱い月に造られし真祖の第二号器にしてその乙名（長老）よ」

ヒラリ、木々に引っ掛かっていた緋色のケープが、散り行く花びらの如く夜を舞った。

## プロローグ（後書き）

そんなわけで真祖の長老、槍兵を召喚。

何故ケイネスに召喚されるはずの彼を召喚出来たのかというと、…

… 次の話で明らかになることでしょう。ええ、きっと。

## 第一話

「元々ね、私はこの戦争に参加する気はなかったの」

冬木市新都の住宅街。

最上階を地上八階とするこのマンションは、高度だけでいうならばすぐそばに群集する他のマンションやアパートメントに劣る。

しかし、外観は一見して築数十年が経過しているとは思えぬほどに整っている。風化せぬようにと重なる修繕は一ミリたりとも損なわず、総てその道のスペシャリストの手によるものだ。

そんなマンションの一室で、アレインティシア・ブリュンスタッドは書架に整理された本を手に取り微笑んだ。

「私が“兆し”を得たのは四年前。……魔術師ってヘンにプライド高いのが多いじゃない？私も昔何度かアトラス院その他モロモロの連中にサンプル扱いされたし、関わりたくないなって思って」

そう笑いながら、霊体化することを主によって禁じられ、所在なげに彼女の一步後ろに控えていたランサーに向かい本を手渡す。

そして書架の一番上　アレインティシアが爪先を伸ばしても届かぬ位置を指差せば、主の意を汲んだランサーは軽々とその場所に本を差し込んだ。

「だけどその時、空気の読めない昔馴染みが現れた。あいつが『退屈凌ぎには持ってこい。面白いものが見られるだろうから』って、私のことをけしかけたのよ」

「……その昔馴染みとは？」

「キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。魔導元帥だの万華鏡カレイドスコープだの言われてる第二魔法の使い手でバ、……………エキセントリック

な翁サマよ」

はあ、と重い嘆息。そのため息には嘆きの他に多様な色を含んでいたが、その色を悟ったランサーは敢えて尋ねなかった。

そしてふと、脳裏に過ぎる。

英霊がサーヴァントとして現世に現界してから与えられる、様々な情報。その中に、彼のものの情報があった。

「ゼルレッチ、というと、」

「そう、大聖杯創造時の立会人。……末のいもうとの後見人もつとめているし、嫌いではないけど私にとって因縁がある相手」

アレインティシアは何の罪もない白い天井を剣呑な目つきで睨みつける。開けた窓から風が一陣入り込み、アレインティシアの周囲に混じった不穏な空気を押し流した。

「私に『死期』はないけれど、退屈は精神を分解するわ。だから参戦することに決めたのよ」

ふと、天井を見つめていたオッドアイがランサーへと視線が下る。ランサーの強い意思を込めた金の瞳とバチリと視線が合うと、アレインティシアがガツクリとうなだれた。

「……………ごめんねランサー。こんな理由で戦うの、きっと私だけよもっところ、ちゃんとした志みたいなのがあればよかったのだけれど」

そんな風に嘆くアレインティシアに慌てるのはランサーである。

既にアレインティシアはランサー　　ディルムッド・オディナの

聖杯にかけた望みを知っている。

デイルムツドが今生に望むものは、騎士としての忠義を、譽を、主に捧げることには他ならない。

生前デイルムツドは、彼の魔貌に魅入られた主君の婚約者に聖約ゲッシュをかけられ、彼女との逃避行を強いられた。そして、彼の主に対する忠義の心は逃避行の間、無惨に引き裂かれていったのだった。

愛はあった。信はあった。慰めはあった。

しかしそれでも、最後は誰も、幸福しあわせにはなれなかったのだ。

「アレインティシア殿、そのようなことは決してありません。今度の戦は貴女には必要なことであられるのでしょうか？」

「……さすがに生まれてから二千年たつとやる事がなくなつて……私が一応、『朱い月』の代理人だから、アレが復活するまで腐蝕するわけにはいかないのよ。民主主義が浸透した最近、面白い話も聞かないし……」

敢えていうならば、彼女の望みこそが『聖杯戦争』なのかもしれない。アレインティシアにとってこの戦いは、数千年に渡る永きを生きている自身の精神的墮落を防ぐ娯楽に他ならないのだ。

いもうとたちのためにも、自分が墮ちるわけにはいかない。とくに、まだ深い感情を理解出来ていない、末のあの娘のために。

「……ああそうだランサー。私やっぱりケ、ケ……、ケ、ケガナイ。エナメル・アーチテンション？とかいうのに菓子折りくらい送ったほうがいいのかしら。悪いことしちゃったから」

「……恐れながら、主。語に違和感があるので調べて参りましたが、あの御仁の名はケイネス・エルメロイ・アーチボルトだとか」

ランサーの控えめな訂正に、アレインティシアは呆気にとられたように目を丸く見開いた。それに、ランサーはバツが悪そうな顔をす

「え、そうなの？」  
「はい」

前述した通り、宝石翁の言葉で聖杯戦争への参戦を決めたアレインティシアはまず、触媒を集めることから始めた。

というのも、何の触媒も用いずに儀式に臨めば、永く生きている彼女の歴史の中で『エニシ』のあつた英雄達の誰かを間違ひなく召喚してしまう。しかし、今更あの友人達に会ってどうするといふのだ。再会は懐かしいし、きつと愛おしさも込み上げるだろう。昔、唇を噛み締めて堪えた別離の涙を回顧するだろう。

だが、サーヴァントとマスターの関係にはありつけない予感がありありとした。なんせ『英雄』とは一癖二癖あるヤツらが多いのだし、その心あたりはひとりふたりなんて数ではなかったから。

さらにいえば、新しい猛者との出逢ひが欲しかった。記録する物語は新鮮で目覚ましいものが多い。

昔からいもうと達に知り得た英雄譚を語ってきた彼女にすれば、その方が都合がよかつたのだ。

触媒ならばきつと魔術協会の管財課が貯蔵しているだろうとこっそり潜り込み、  
かくして彼女の考えは見事に的中した。

あとはディルムッドを召喚するための触媒を管理していた人間に魔眼“黄金”の魅了チャームをかけてその荷を強奪し、……………一応荷の主を確かめて、それからすぐに極東の島国へと飛んだのだった。

「最近の人間の名前は長いわね、面倒じゃないのかしら」

もう、とアレインティシアはぼやく。しかし昔はもつと長い名前の人間も多数いた。

彼女は基本的に、興味・関心をそそられる人間以外の名前は10文字以上で「長い」と認識しているのだ。故に、「聖遺物を拝借した

貴族魔術師」程度の認識たるケイネス・エルメロイ・アーチボルトの名は、アレインティシアからすれば長いし覚えにくいことこの上ない。

「見舞い、やめるわ。考えてみれば魔術師たるものが荷物　それも英霊にゆかりのある聖遺物の管理を怠るなんて呆れるにもほどがある。

大切なものなら、なおさらよ」

アレインティシアはそう締めくくると、ガラス製のテーブルに広げられた新聞の見出しに鋭い視線を投げかけ、そして小さく呟いた。

「……………本当、嫌になる。この町は人間の血臭が思いの外強いわ。」

地元の新聞は、この冬木に流れ現れた殺人鬼の齎した凶行を、高らかに語っていた。

## 第一話（後書き）

【CLASS】ランサー

【マスター】アレインテイシア・ブリュンスタッド

【真名】デイルムツド・オディナ

【性別】男性

【身長・体重】184cm・85kg

【属性】秩序・中庸

【ステータス】筋力A 耐久B 敏捷A+ 魔力B 幸運A 宝具A

【クラス別スキル】

対魔力：B

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。

大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

【固有スキル】

心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す“戦闘論理”

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

愛の黒子：C

魔力を帯びた黒子による異性の魅惑。

デイルムツドと対峙した女性は彼に対する強烈な恋愛感情を抱く。

対魔力スキルで回避可能。

【宝具】

『破魔の紅薔薇』  
ガイ・ジャルグ

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：2～4 最大捕捉：1人

魔力による防御を無効化する長槍。

魔力によって編まれた防具はこの槍の攻撃に対し効果を持たず、また武具に施された魔術的な強化、能力付加もガイ・ジャルグと打ち合う場合には

一切発揮されなくなる。

事実上、物理手段によってしか防御できない《宝具殺しの槍》。

ただし、過去に交わされた契約や呪い、すでに完了した魔術の効果  
を覆すことはできない。

『必滅の黄薔薇』  
ガイ・ボウ

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：2～4 最大捕捉：1人

回復不能の傷を負わせる呪いの槍。

この槍によるダメージはHPの上限そのものが削減されるため、  
いかなる治癒魔術、再生能力をもつてしても『傷を負った状態』  
にまでしか回復することができない。

ディスペルは不可能で、呪いを破棄するためにはガイ・ボウを破  
壊するか、

使い手であるディルムツドを滅ぼすしかない。

「星の触覚」たるアレインティシアがマスターなため、ディルムツ  
ドのステータスはかなり安定しています。ぶつちやけ反則じゃんこ  
し。

## 第二話

「本当に参戦なさるおつもりですか？ 姉様」

鈴のような声音が、静謐を沈めた城に響いた。自分と末のいもうとしか居住していないはずの城に、ひとつの気配。

アレインティシアが振り返れば、不満げな表情をありありと浮かべるもうひとりのいもうとの姿がそこにある。金に一滴の水銀を混ぜた色の月灯に、漆黒の髪が艶やかに浮かび上がった。

「アルトルージュ」

アルトルージュ・ブリュンスタッド。

アレインティシアの後に作られた『朱い月』の後継候補であり、死徒を率いて派閥を作り上げた『死徒の姫君』。

真祖の長老たるアレインティシアとは分類的には対立する立場にあるが、アルトルージュが生まれてからその面倒を見てきたのは紛れもなく彼女である。異国の譚を聴かせ、歌を聴かせ、慈しんでくれた唯一の愛情をアルトルージュが厭う理由があるはずなく。

むしろ、『なにを一番愛しているか』と問われれば、「姉である」とその薄い胸を張って誇らしげに即答することだろう。

「私が心配かしら？」

「いいえまさか！ 姉様に害を為せるものなぞ、それこそアルテミット・ワンしか有り得ぬでしょう。………ただ、」

言葉に詰まった様子で俯いたアルトルージュに、アレインティシアはパチリと目を瞬いた。

俯きながらも月明かりは彼女の紅潮した頬を照らしだし、その細い

身体はフルフルと小刻みに震えている。  
具合でも悪いのかと首を傾げた瞬間、アルトルージュは奮然と顔を上げて感情を爆発させた。

「ね、姉様は“外”に気を取られ過ぎていると思うのです！わたしに全然構ってくれないんだものー！」

ふええんと泣き始めたアルトルージュに、アレインティシアはギョツと身を反らした。

アルトルージュは幼い外見をしているが、精神は立派な淑女である。そのレディが外聞も恥もなく、まあ姉の前でだけだろつが鼻水すら垂らして泣き喚きはじめた。ああこんな姿、彼女の騎士達には見せられない。

どうやら末のいもうとにはばかり構いすぎていたらしい、とアレインティシアはようやく一ノ姫の心情を理解し、あの手この手を尽くして慰めその翌日。

アルトルージュは生き生きとした表情で、妹の作り上げたブリュンスタッド城を陽気なあしどりで後にしたのだった。

夜風がアレインティシアの身を撚る。

見据える先、闇の中の潮騒は優しく、しかしこちらを呑み込もうと蠢く波間はおどろおどろしい。ふと興味が湧いて、その闇の中に手

を差し込んでみた。  
とぷりと、闇に手が飲み込まれる錯覚。

「主、危険です」

それを咎めた傍らに立つランサーに、アレインティシアは朗らかに微笑う。

季節は冬。海に満ちる水は手の感覚を殺すほどに凍えていたが、鼻腔をつく汐の香りが好ましく、そのまま手をばたつかせた。軽い音が、無音に響く。

「平気よ。落ちたりしないし、落ちても助けてくれるでしょう？」

「落としません」

即答であった。

律儀な騎士に苦笑するも、手を引き抜かないアレインティシアに痺れを切らしたランサーは、失礼します、と闇汐からその手を抜きとる。その凍えるような冷たさに整った眉を寄せると、懐から手早くハンカチを取り出し、丁寧な仕種でその織手に巻いた。

その些細な温もりにアレインティシアは小さな驚嘆を浮かべ、まじまじと緑色の布を凝視する。

それは彼女が彼に買い与えたモノであった。しかし、こんな温い機能はついていなかったはずだが。

「……………あつたかい？」

「アレインティシア殿の命で常時実体化していますから、体温が移ったのでしょっ」

ほんの僅かな移温。けれど冷えたアレインティシアの手には、とても安らげる温度であった。

一陣の風邪がふたりの間を駆け抜けたその刹那、ランサーの纏う気配が色を変える。見上げれば、武人の顔付きをして目を細めたランサーが、海浜公園の先の先を見据えていた。

「……敵のサーヴァント？」

「そのようです。……挑発に乗ってきたか」

「うれしそうね」

「……アレインティシア殿にはご足労をおかけし、申し訳なく思います」

「ご足労？まさか！とつても楽しかったわ。貴方みたいな美丈夫を連れて歩くのはね」

アレインティシアとランサーは、今日一日中街を練り歩いて過ごした。それは他のサーヴァント、マスター達への挑発行為に他ならず。

しかし途中、約80年振りに日本を訪れたというアレインティシアが、時代とともに変化した町並みに興奮し、ウィンドウショッピングに勢を出し始めたりもして数度脱線もしたりしたが。

「でも貴方の黒子、一般人には刺激が強すぎるわね。あんなに女子に睨まれたのは初めて。後で何とかしましょう。西側に倉庫街があるわ。そこにおびき出しなさい」

「はッ」

傳くランサーに背を向け、アレインティシアは地を蹴った。

真祖の脚力は音速を越す。すぐに目視不可となった主の姿を眼裏に刻み、ランサーは迫る英雄との交戦に猛る心を押さえ付け、己が宝具をその手に喚び出した。

## 第二話（後書き）

アレインテイシア・ブリュンスタッド【1】

誕生日：12月24日生（自称）

身長：168cm / 体重：50kg

スリーサイズ：B88 / W55 / H85

髪は金、目は紅と蒼のオッドアイ。誰そ彼と彼は誰の色。

「朱い月」が作成した真祖の二号機。プロトタイプ。自我が強すぎてウツワと成れなかった「朱い月」の紛い物。

生まれてから本人曰く「二千とちよつと？」らしい。しかし実際はそれを上回るとか。

基本的に興味・関心をそえられる人間以外の名前は10文字以上で「長い」と認識。そして覚ええない。しかし逆に興味さえ持てばどんなに長い名前でもフルネームで暗記できる。

ちなみに、「最近は」というくだりはクセのようなもの。例えば千年昔でも「最近は」とつける。

初機が既に“破棄”されているため、「朱い月」の復活までは彼女が真祖その他の統括者。通称「長老」。でもその呼び名は可愛くないので日本で発見した“乙名”を使ってほしいと思っている。

## 第三話

夜陰を切り裂く剣戟の音。

超高速で展開する二体のサーヴァントの対決を、アイリスフィール・フォン・アインツベルンは驚愕に息を呑みこみながらも見守っていた。否、それしか出来なかった、というべきか。

二体の英霊が己が得物を一薙ぎするたびに風が唸り、倉庫街が破壊されていく。空気がジリジリと焦がされている気さえした。

たったふたり。二体のヒトガタ。既に死して朽ちた、常世からのマレビット。

しかし、それが齎す脅威に驚愕、戦慄に似た興奮。

過去の神話に伝説。人々の幻想に対する信仰によって精霊の粹にまで押し上げられた存在を、科学によって鍛えられた現世に現界させるといふ奇跡を実現する聖杯戦争。

アイリスフィールは自分の『神話の再現』に対する認識の甘さを自覚し、眦にほんの少しの陰を滲ませた。

一方、アイリスフィールを仮のマスターとするサーヴァントは、三度目になる踏み込みを双槍に阻まれ、内心で舌打ち大きく後ろに飛びすさった。

開いた距離に、槍を構え直し口元に小さく笑みを乗せたランサーは、擲擧するように小柄な英霊に声をかける。

「どうしたセイバー。攻めが甘いぞ」

「……ッ」

少女の体から発せられる清澄な闘気。それを感じ取ったランサーは、一目で彼女を剣の騎士の英霊、セイバーのクラスにある存在だと看破した。そこでセイバーはランサーの戦人としての格を、己の評価

よりワンランク上げるべきだったのだ。

ランサーが自身の腕の延長の如く滑らかな動作で操る呪符に巻かれた槍は二本。セイバーはその片方を、長年の武具とのせめぎあいの経験から擬装の策の代物だと勘繰って戦いに挑んだ。

長槍か、短槍か。どちらが彼の真の得物 宝具なのか。

それを見極めるためにと、セイバーはランサーの槍捌きを見切るのに専念して鏢ぜり合っていた。

しかし いまだ、それを成しえることが出来ない。

その事實は、相対するこの双槍使用の美丈夫が、相当の実力をもつ騎士だつわものということの何よりの証明となっている。

総身を、武者震いが駆け抜けた。

「……………なんて派手な。トタンが次々吹っ飛んで壁まで剥がれてきてるけど……………あれ、修理代回ってこないわよね。監督側がなんとかするわよね？」

英霊達の鏢ぜり合いに興奮しつつも、人っ子ひとり見当たらない倉庫街の一角に身を潜めたためにじんわりとした孤独感を味わっていたアレインテイシアは、空を舞い海へと消えていくトタンの一部を見送りつつ、迫り来るかもしれない領収書の束を脳内に幻視して静かに戦っていた。大丈夫よね。アインツベルンがなんとかするわよね。貴族筋ですものね。嫌よ、こんなことでお金使うの。

「……………あ、いけない」

じつじつと嫌な汗を滲ませた掌を開き、周囲に視線を巡らせた。

聖杯戦争はサーヴァント達が闘う舞台であり、マスターはそのバックアップ。伝説の相手は伝説の存在に。

聖杯戦争の慣例に従い戦闘はランサーに任せ、アレインティシアはその分彼が疎かになるであろう周囲の警戒を受け持った。

そして、彼女の目、視界の端。夜色ではない影が引つ掛かる。

「……………んー？」

なにあれ、と。アレインティシアは額に手を水平に当て、目を細めて夜の闇に紛れるその存在を遠視する。

セイバーとランサーの対決を見守るのに最適であろう、岸壁にそびえ立つデリッククレーンの上部。倉庫街の街路から500メートルは離れたその場所。

そこに、漆黒のローブを纏った白い髑髏の面が居た。

「……………サーヴァント？あの髑髏面、アサシンかしら。山の翁、ハサン・サツバーハ」

むしろサーヴァントでなかったら色々な意味であればヤバイ。魔術師でもあんな格好はしないだろう。

にんまりとアレインティシアは笑う。ああ、やっぱり。

「生きてたのね。……………謀ったわねコトミネ。トオサカも共犯かしら」

無論、アレインティシアは先日遠坂邸で起きたアサシンの敗退を、霊体化し監視していたランサーからの報告で聞いてはいた。しかし彼女はそれに僅かなきな臭さを感じていたのだ。

一体の隠密<sup>アサシン</sup>を得手とする者に対しての過剰な猛攻。それに演出の色を見出だしたアレインティシアの読みは、当たっていた。

全ては遠坂と言峰が仕組んだ寸劇。他のマスター達に『アサ

シンは敗退した』と思わせるための、茶番劇。

「でも一体屠られたのは確かなのよね、ランサーの報告だと」

それと、先ほどからどうにも視線を感じるのだが。これはあれか、喧嘩を売っているのか。来るなら来い、人間なら相手してやるぞ。英霊の皆さんなら真名次第でやる気変わります。アレインティシアはそう意気込む。

しかし、彼女は気づいていない。

確かに、アレインティシアを光量増幅スコープ越しに監視する人物は居た。

セイバーと確固としたパスが繋がっている、彼女の真の主人。“魔術師殺し” 衛宮切嗣。魔術師ではなく魔術使いであり、魔導の粹術よりも科学の結晶を好む、アインツベルンに雇われ、聖杯として鑄造されたアイリスフィールと結ばれた冷徹で脆い殺し屋。

「……………無理だな」

彼は小さく舌打ちし、スコープから目をずらす。

セイバー達東の方向。熱感知スコープで敵マスターらしき人物がいるのは判明していたが、角度が悪かった。

つまり。

アレインティシアは、偶然によってその身を護られていたのだった。それに気付かぬアレインティシアはいつまでたってもアクションを起こさぬ“誰か”に焦れ、しかしその感情を逃がすように大きく息を空に溶かした。

「仕方ない、行きましようか。セイバーのマスターっぽいひと姿さらしてるのだし。というか、ここからじゃよく見えないし暇だわ

……………」

後半が彼女の本音であったことは言うまでもない。

アレインティシアは身を屈めると、足元に立てかけて置いた傘を手に取り一降りする。

音を立てずに開いて膨らんだ傘をさし、一廻し。

アレインティシアは優美な所作で歩きだし、戦場へと赴いた。

「賞賛を受け取れ。ここに至って汗一つかかんとは、女だてらに見上げた奴だ」

膠着状態に突入したランサーとセイバーの対決。

英霊の武の余波をまともに受けた街路は、無情にも元のありようを喚起できぬ程に破壊されていた。この様を子供がみたのなら、きつとこつ心に刻むであろう。ゴジラは本当に居たのだと。

ランサーは切先に漲る殺気はそのままに、涼しげな眼差しでセイバーに語りかける。

大気を纏い不可視とする剣を掲げたセイバーもまた、笑みをみせた。

「無用な謙遜だぞ、ランサー。貴殿の名を知らぬとはいえ、その槍捌きをもってその賛辞……私には誉れだ。ありがたく頂戴しよう」

真名を名乗れぬ興なき戦いに、しかし彼らの心は弾んでいた。

どちらも自ら、重ねられた年月とともに鍛え上げた技と力は確かな己の誇り。それに匹儔するだけの敵と今、時代を越えて相對している。その昂揚感、相手への畏敬へと繋がっていた。

そして。

「 中々苦戦してるじゃない、ランサー」

その声は、響いた。

「ランサーの……マスター!？」

「主………!？」

軽い靴音はランサーの三步背後で止まる。愕然としたランサーの声と、驚愕に満ちたアイリスフィールの声にアレインティシアは唇に笑みを刻むと、傘を僅かに傾けて敵陣営へ顔をさらす。

「初めまして、可愛らしい剣の騎士とそのマスターらしき方」

そう笑う女に、アイリスフィールは状況を忘れて一瞬魅入った。月の光をくしけずって毛髪としたような長く艶やかな髪。長い睫毛に縁取られた黎明と黄昏色の瞳。朱いワンピース。

アイリスフィールが貴族の姫だというのなら、彼女は亡国の皇女のように。

そんなアイリスフィールの視線に、アレインティシアは首を傾げ

ああ、と傘に視線を向ける。どうやらアイリスフィールの視線の意味を、傘に見惚れているものとして受けとったらしい。

百合とアネモネが描かれた、否、刻み込まれた美しい細工品。

「綺麗でしょう、この傘。知り合いの錬金術師に水晶とダイヤモンドと、解析不可能だったナゾの物質で錬成して造ってもらったの。薄く見えるけど超頑丈。強化魔術重ね掛けしまくった対物理的攻撃防御仕様です。壊したいならRPGを至近距離でスガンと一発どうぞ」

後半、まるで通販案内人のような口調だった。

その言葉を聴力強化で何とか拾った切嗣は、眉間に皺を寄せる。ランサーのマスターの発言が本当ならば、用意してきたライフルは使えない。通常のそれよりも一回りほど大きな傘は主の頭部と胸をしっかり守護していた。即死させられなければ彼女のサーヴァントは間違いなくこちらを捕りにくる。アサシンの監視がある以上、彼の切り札は使えない。今まで彼が狩ってきた魔術師達とは違い、物理的な防御を用意しているものが現れるとは。

「主、何故こちらに」

ランサーは困惑していた。確か、彼女は倉庫街のどこかに身を潜め、戦況を見守っていたはずだったのに。

そんなランサーに、アレインティシアは視線を逸らしてふっと笑う。

「察しなさいランサー。……暇だったのよ」

「何ですかそれは！」

思わず敵方のセイバーが突っ込む。そんな理由でサーヴァントの戦いの場に姿を現したというのか、この魔術師は！

しかしこれにはアレインティシアも猛烈に反論した。

「だって視線寄越してたナニガシは何のアクションも起こさないんですもの！私に案山子になってるって言いたいのか？つまらないにも程があるわ。      ランサー！」

「ハッ」

アレインティシアの発言に些か脱力していたランサーは、最後の毅然とした鋭い声に背に張りを取り戻す。

「セイバーが難敵だということ、打ち合ったそなたにはよくわかるはず。宝具の開帳を許そう。英霊の真たるその姿、この私に魅せてみよ」

それまでの声とは打って変わり、威厳に満ちた彼女の声音。表情を消し去り、ただ己が騎士に勝利のみを求める主の威容。

これが、真祖を統括する者としてのアレインティシアの姿。限りなく王に近き存在の厳粛な下命。

ランサーも飄とした気風を内に引き戻し、肅然とその命を飲み込んだ。

「了解した、我が主よ。我が槍技、貴女に見せて魅せよう」

美貌の槍兵は武器の片割れ 短槍を足元に未練なく放り捨てる。構えられた長槍からは、その姿を隠し真名の発覚を防いでいた呪符が剥がれ落ちていった。

“……………?”

セイバーと同じくその姿をあらわしたランサーの宝具を凝視していたアイリスフィールは、自分を見つめる視線に気づいてその視線の主へと目を向けた。

自分とは正反対の、金の髪。人でないものの血でも流れているのか、はたまた限りなく0に近い確率の賜物か。これは自分と同じ否、それよりも複雑な彩をした赤い目。

彼女はアイリスフィールと視線が合うと、先までの表情を崩し、嬉しそくに破顔した。

その意味をアイリスフィールはまだ、理解出来ようもなかった。



## 第四話

「私、他者の治癒苦手なのよね」

闇夜に咲く薔薇の如く色鮮やかに散らばった血の華を一瞥し、アレインティシアは素早く小袋に入れていたエメラルドを掌中で微塵に砕いた。ルーン文字の刻まれた翠玉に籠められていた符力は、破壊によって威力を増幅しラインを通してランサーの傷に作用する。

ちなみにこの符、日本に訪れ暇潰しに会いに行った封印指定の魔術師製作のものであり、アレインティシアが淑女、というより一般常識に乗っ取ってキチンと代価を支払って頂戴したものだ。とある平行世界の未来において、末の妹が柳洞寺の魔女から『魔法の杖』を対価代価関係なしにぶん取った未来なぞ、今の彼女には見えるはずもなかった。

話は戻る。

アレインティシアは魔術師ではない。魔術という神秘を行使せずとも彼女は充分過ぎる戦闘力を保有しているし、そもそも精霊であり初期の真祖たる彼女は魔術回路を持たずに生じたのだ。魔術回路がなければオドやマナを魔力に生成することなど到底不可能である。故に、真祖であることを隠蔽するためにいくらか護符　ルー  
ンが刻まれた石を魔術師から貰ったのだ。石を砕き、媒介から符力を解き放つことにより神秘を紡ぐ。これで簡易的であるものの、アレインティシア自身が魔術を行使しているように見えるという寸法だ。

魔術回路のないアレインティシアが魔術を使うには、ここまでの手間がかかるのだ。それなのに何故、魔力によってこの現世に降り立つことの出来るサーヴァントを現界させることが出来ているのかと問われれば、アレインティシアはこう答えるしかできない。

まったくもって謎である、と。

「成る程……ひとたび穿てば、その傷を決して癒さぬという呪いの槍。もつと早くに気付くべきだった……」

左腕に傷。出血は浅いが腱を切られ、五指の内、剣を握る要たる親指がどうあつても動かぬ。

鎧を捨てた己の失態を齒噛みしつつ、闘気収まらぬ目でランサーを見据えた。

今なら分かる。彼の伝承の発生地も、その真名も。

魔を断つ赤槍『破魔の紅薔薇』、呪いの黄槍『必滅の黄薔薇』。

加えて魅了の魔力を持つ黒子。

これだけの条件を持ちながら、同じ地に生きたセイバーが彼の真名を看破出来なかったことの方が、今では不思議なのだ。

「フィオナ騎士団、随一の戦士……“輝く貌”のデイルムッド。まさか手合わせの栄に与るとは思いませんでした」

「それがこの聖杯戦争の妙であろうな。      だがな、誉れ高いのは俺の方だ。時空を越えて『英霊の座』にまで招かれた者ならば、

その黄金の宝剣を見違えはせぬ」

風を纏わせることによる光の屈折率の変化。それによってその姿を秘匿していたセイバーの宝具。

黄金に輝きながら高潔な者の傍らにあるそれは、古に存在した王の聖剣。

「ブリテンの守護神。彼の国を象徴する赤き竜。      アーサー・ペンドラゴンが、セイバーの真名」

クルリと傘をひと廻し。アレインティシアの謡うような声音に、ランサーは小さく誇らしげな笑みを浮かべた。

アレインティシアが名を覚える程の関心を持つ後世の王と鏢ぜり合い、一矢報いることが出来たとは。

「覚悟しろセイバー。次こそは獲る」

「それは私に獲られなかった時の話だぞ。ランサー」

どちらの宝具もこの場にさらされた。しかしどちらも負傷の差異はあれどもその場に立ち、不屈の瞳にて互いを射抜いている。まさに一触即発の緊迫感に満ちた状態で。

「ランサー、」

アレインティシアが顔を上げ、東南方向の空を凝視した。

「何か、来るわ」

その言葉がサーヴァント二体の耳に浸透するよりも早く、轟いた雷鳴に鈴の鳴り声が塗り潰された。

夜空に散らばる星の中、紫電がスパークを新たな星にと撒き散らす。こちらを目掛け一直線に駆けて来るそれは、古風な二頭立ての戦車だった。

装飾に飾られたそれを牽くのは逞しくも美しい牡牛。蹄が、車輪が、蹴り立て踏み鳴らすのは大地ではなく、虚空に蜘蛛の巣状に広がった稲妻に他ならない。

迸る圧倒的な魔力。新たなサーヴァントの参入に、ランサーは背後の主の許まで跳躍しその背に庇う。セイバーもまたアイリスフィールの許まで跳んで、小柄な身体で主人を隠した。

雷を降した戦車はやがてゆっくりとした速度で戦場に降り立った。

「双方、武器を収めよ。王の御前である！」

そう高らかに吼えたのは、雷光が収まり露わになった御者台の巨漢。

彼はセイバーとランサーの両名の対決が中断したのを確認するや、敵かに名乗りを上げた。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

場を、呆気に取られた沈黙が支配した。

聖杯戦争には古今東西、旧くは紀元前、新しくは未来の英霊が参集される。いくら英雄として活躍していた時代に隔たりがあるとしても、“座”に招かれた彼らには英霊の情報を知識として持ち合わせている。

故に、聖杯戦争の場では相手の真名を知ることがつまり、戦略の上で非常に有利になれる、ということである。例えばギリシャ神話の英雄であるアキレスならば、『アキレス腱には加護がない』という風に弱点すら知り得ることができるかもしれないのだから。

その真名を、ライダーのサーヴァントはあっさりとバラした。そしてその表情も実にあっさりとしたものだ。気分爽快。そんな感じ。

「何を　　考えてやがりますかこの馬ッ鹿はあああ！！」

が、そんなライダーとは正反対に顔を青ざめ、その体躯の差を気にも留めずに彼に食ってかかったのは他でもない、ライダーのマスター、ウェイバー・ベルベットである。

しかしライダーはウェイバーの額をデコピンで打ち抜くことでその抗議の声を黙らせ、尚も言葉を重ねてきた。

突き詰めれば、それは交渉であった。要約すると『我が軍門に降って聖杯を自分に譲り、一緒に世界征服しようぜ！』という内容の。

セイバーとランサーは完全に途方に暮れていた。アイリスフィールは遠い目をしている。場に流れる空気が一気に変質してしまったのだ、この征服王のせいだ。

「先に名乗った心意気には、まあ関心せんでもないが……その提案は承諾しかねる」

そんな空気の中で苦笑しつつランサーはそう告げたが、眼光だけは笑わずにライダーを威嚇する。

「俺が聖杯を捧げるのは、今生にて誓いを交わした新たな君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ、ライダー」

「……そもそも、そんな戯言を述べ立てるために、貴様は私とランサーの勝負を邪魔立てしたというのか？」

セイバーの顔には笑みすら浮かんでいなかった。声に不快感を滲ませ、低い声でライダーの言葉を両断する。

「戯れ事が過ぎたな征服王。騎士として許し難い侮辱だ」

セイバーとランサー。根っからの騎士である二人から容赦ない敵意をぶつけられ、ランサーはさも困窮したように唸る。しかし征服王は諦めなかった。

「……待遇は応相談だが？」

「くどい……」

一蹴である。さらにセイバーが口を開こうとした瞬間。

「ぶ、」

刹那。

「アハハ　　アハハハハハ、アハハハハハハ　　！！！」

盛大な笑声がランサーのすぐ背後から響き渡った。

ギョツとして皆がそちらに視線を注げば、やはりというかなんというか、アレインティシアが腹を抱えて大爆笑していた。

「アレイ、あ、主？」

「だ、ダメ、なんかツボに　　アハハハハ！！し、しぬ、

ゲホ、ガハツ、」

「主　　！？」

とうとう呼吸困難を起こした様な主人の背中をランサーは必死で摩る。まさか真祖を笑いだけで呼吸困難に追い込める人間がいるとは！

場には暫く笑いの神と格闘しているアレインティシアの喘鳴が響いていたが、三分程たつと落ち着いたらしく、アレインティシアはコホンとわざとらしい咳ばらいをした。

「……………ランサーのマスター。その、大丈夫ですか？」

「え、ええ。もう大丈夫。ありがとうセイバー」

セイバーからのまさかの気遣いである。アレインティシアは軽い羞恥から頬を紅くしながらも、ライダーに近づいた。ランサーはそれに目を細めると、彼女の斜め後ろにたつ。アレインティシアの望みを知っているからだ。

アレインティシアはライダーの前に立つと、ワンピースの両端を摘んで浅く上体を屈める。そしてまたすぐにライダーの顔を見てに

っこりと笑った。

「初めまして、イスカンドル王。お会いできて光栄ですわ」

「応、呼吸はもう大丈夫なのか？」

「ええ、平気。平気です。大丈夫ですとも。あ、握手。握手

してもらっても？」

「うむ、よいぞ。余もそちのような美女とするのならは大歓迎よ」

ウチウキとアレインティシアがほっそりとした白魚のような手を差し出せば、ライダーの無骨な手がそれを包んでブンブンと手を振る。どちらも嬉々とした笑顔である。

呆気にとられたようにセイバーとアイリスフィールが口を開いたまま固まる。ランサーはただ注意深くライダーの動向を監視していた。

やがて双方の手が離れると、ライダーが小首を傾げてアレインティシアに視線を合わせる。

「其の方、名を何というのだ？」

「名を話すことは禁じています。近い者はアレインと呼ぶこともあるけれど」

「ではアレイ。どうだ、そちは。我が軍門に降る気は？」

そのイスカンドルの言葉に本気を感じ取り、アレインティシアはきよとんとしてパチリと目を瞬かせた。しかしすぐにそれを苦笑にかえ、首を横にふった。

「うーん。悪くない話だけど、ごめんなさい。やることがあるから無理ね。私にも立場があるし」

「……………むう」

ライダーは残念そうに唸り、そしてグルリと辺りに視線を走らせる。セイバー、ランサー、そしてそのマスター達。

「こりゃー交渉決裂かあ。勿体ないなあ。残念だなあ」

ライダーがそうばやけば、ウェイバーが怨みに満ちた低く掠れた声で己がサーヴァントを非難する。しかし悪びれもないライダーに泣きじゃくりながらその胸鎧をポカポカと連打して泣きじゃくった。

アイリスフィールが軽蔑するか同情するか、どうするべきか悩んでいる間に、アレインティアがウェイバーの背をぽんぽんと叩く。

「泣ーかーなーいーのー。貴方は偉大な英雄を召喚したのよ？誇りこそすれ、どうして嘆くの。『さっすが征服王、初っ端から真名をバラすなんて何と言う懐の広さ！』、みたいな感じで感心していればいいじゃない」

「アリーの言う通りだぞお坊主。きさまには度量が足りんだ、度量が！」

「何オマエ敵マスターと息投合してんだよ〜！」

それはランサーも感じていたことだった。まさかライダー、アレインティアと相性が良いのではないだろうか。

考えてみればアレインティアは王族であり、現在生き残っている極々僅かな真祖を束ねる長の役目をはたしている。そしてイスカンドルは言わずとした世界を統合しかけた生粋の王。相性がいいのは当然か。

浮かんだ疑惑にランサーは戦慄した。しかし主のサーヴァントは自分なのだ、自分。

そんな風に。

『 そうか 』

色んな意味で弛緩した空気は、再び氷河期かくやの勢いで氷つくこととなった。

『 よりにもよって貴様が、ウェイバー・ベルベット 』

#### 第四話（後書き）

お待たせしてしまっすすみません。夏は苦手なんです、気温高くて。

ネタとして。

アレインティシアの口調が段々雑（？）になってきたのは深夜テレビのせいです。真祖の乙名、ブラウン管に興味津々。

## 第五話（前書き）

遅くなりました………！

## 第五話

冷徹な声だった。込み上げる怒りをなんとか押さえ、しかし胃の腑の内からしぼりだしたかのような声音だった。

突如響き渡った聞き覚えの無い声に、アレインティシアだけではなくセイバー達も困惑の表情を浮かべた。

ただひとり、ウェイバー・ベルベットを除いて。

「……ちよつと？」

「……うあ……」

見れば、自分より背の低い童顔の魔術師が顔を蒼く染め上げて凍りついていた。

幻覚を孕んだ声の発生源はわからない。少なくともアレインティシアの可視範囲にこの声　　怨嗟と呪詛、侮蔑に浸した声音に適合するような人物は見えない。建物の陰に隠れているのだろう。

『残念だ。実に残念だなあ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才は、凡才なりに平庸で平和な人生を手に入れられたはずだったのにねえ』

気味が悪くなるような猫撫で声で男の声はつめたい色で優しく語る。侮蔑と憤怒を隠しきれなくせに、どこまでもねちっこく。

……しかし『凡』という字が多い。

話の内容から察するに、ウェイバー・ベルベットとこの声の主は師弟関係にあるのだろう。の、割には師匠が随分弟子をこき下ろしている気がするが。

『致し方ないなあウェイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本来の意味　その恐怖と苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ。光栄に思いたまえ』

「　ならさっさと出てきなさいな、魔術師」

鼻にかかる高慢な声を切り裂いたのは、不快げに顔をしかめて腕を組んだアレインティシアだった。

「気色わるいのよ貴方。言い方がいちいち鼻につくわ」

『……盗っ人風情が、よくも私にそんな口をきくものだな』

……WHAT？

そんな空気が再び場に流れはじめた。え、盗っ人？

必然的に場の視線を独り占めにしたアレインティシアは、男の声にきよとんと目を瞬く。

「……え、何で知ってるの？」

『……そのサーヴァントはデイルムツド・オディナだろう。お嬢さん、君が私の元から聖遺物を強奪した犯人なのだろう？』

沈黙がその場に満ちた。

セイバーは呆けたように口を開き、先程まで死合っていた槍の騎士に視線を移す。まごうことなきデイルムツド・オディナの真名をもつ双槍使いは、片手で頭を押さえていた。

そしてセイバーの（仮）マスター、アイリスフィールは話の展開に口を引き攣らせた。話から察すると、もしかしたらこの声の主は二回も聖遺物を盗まれたおバカさんなのだろうか。

「……！ま、まさか貴方……！」

アレインティシアが目を瞞って数歩後ろによるける。わなわなと身体を震わせ、冷たい夜を裂くように叫んだ。

「ケテナイ・エガナイ・アチャーテンション!？」

『ケイネス・エルメロイ・アーチボルトだ!！』

「え、違うの!？」

「どんな間違いだよそれ!？」

もはや原形を留めぬ致命的過ぎる間違いにケテナイはヒステリックに自身の名を叫び、恐怖に凍んでいたはずの彼の弟子たるウエイバーも、凍りついていた咽を解凍させて思いきり突っ込んだ。シリウスは何処へ飛んでいった。

「中々豪壮な間違いだのうアライ!！」

豪快なライダーの笑声が星空に響き渡り、彼の大きな手がウエイバーの肩を包み込む。その守護の気配に、ウエイバーは驚いたようにライダーの顔を凝視した。

「おう魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だったらしいな。……だとしたら片腹痛いのう。余のマスターたるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ。姿を晴す度胸さえない諸病者なぞ、役者不足も甚だしいぞ」

「……………」

それは如何程の屈辱か。

ライダーの憫笑はまっすぐに姿を隠すケイネスに向けられている。歴史に名を刻んだ大英霊に主とされているのは華々しく地位を確立した自身ではなく、凡夫と罵り、嘲したウエイバー・ベルベット。

武勇に富んだ忠義心高きフィオナの騎士に傳かれ、その背に護られているのは自身の宝物を盗んだ下賤な女。

それは、如何なる恥辱と屈辱か。

ケイネスの怒りが伝播する気配に、アレインティアは愉快そうに目を細めた。

「おいこら！他にもおるだろうが。闇に覗き見をしておる連中は！」

『……これは、拙いな』

「拙いですね」

冬木教会を陣地とする言峰綺礼の宝石通信機ごしの報告を聴き、遠坂時臣は苦々しく呻いた。綺礼もまた、普段滅多に変えることのない表情を顰めて頷く。

アレインティアの予測は正しかった。

遠坂時臣と今度の聖杯戦争の監視役、言峰璃正は知己である。万能の願望器たる聖杯を正しく運用してくれるであろう遠坂に、言峰は秘密裏に協力の盟約を交わしていたのだ。序盤に敗退されたとされるアサシンの令呪は未だ、綺礼の手に輝いている。

時臣は額に片手をやり、俯いた。この挑発に乗るであろう、己がサーヴァントを脳裏に描いて。

そして、伝説はまた姿を現す。

ライダーの挑発に呼応するように、眩ゆい黄金の輝きが街灯のポールの頂上に現れた。

夜の闇を掃うように輝く甲冑は、一切の曇りない黄金。こちらを睨み据える瞳はピジョン・ブラン。

「あいつは……」

鮮烈な姿であった。その強烈な威圧感に胸を過ぎつたのは、昨夜遠坂邸にて起こったアサシンの敗退劇。多様な宝具にて英霊をあっさりと葬り去った、アーチャーのサーヴァント。

「我を差し置いて“王”を称する不埒者が、一夜のうちに二匹も涌くとはな」

「難癖つけられたところでなあ……イスカンダルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが」

「たわけ。真の王たる英雄は、天上天下に我ただ独り。あとは有象無象の雑種にすぎん」

あれ、とアレインティシアは眉を寄せた。

別に開口一番に侮蔑に塗れた毒舌を吐かれたせいでも、サーヴァントを『匹』扱いたせいででもない。侮辱を侮辱ではなくただ当然のこととして言うる彼に腹が立つたわけでもない。

ただアレインティシアがアーチャーを見た瞬間、思考の端で何か引つ掛かった。

(……私の記憶じゃない、わね。……じゃあ『朱い月』の記録……?)

困惑気味に内心首を傾げていると、ライダーやセイバーを睥睨していたアーチャーの目がふとアレインティシアに向けられ　と　ともおかしな表情をされた。

「……ほう。女、何故貴様のようなものが此処に在る？」

奇妙なものを見るような奇異の視線を向けられ、アレインティシアはゲツと小さく零した。

黄金色の魂を持つこの英霊は、アレインティシアの想像していた“格”よりも上位に位置する英雄らしい。

(う、嘘でしょー！？)

ヒトではないもの、そして本来ならばこのような場所にいるべきではないものだとバレてるっぽい。さすがに種族までは気付かれていないはずだが。

アーチャーは先程までの不機嫌さはどこにいったのか、片手を顎に当ててとても愉しそうにこちらをまじまじと見つめている。まるで絵画かなにかを鑑賞しているような雰囲気だ。

冷や汗が背を伝い落ちる。アーチャーは何処の、否、何時の時代の英霊なのか。ただ視線を投げかけただけでアレインティシアの正体を看破するなど、そこらの英霊はもとより、伝説色濃いそれらにもできることではない。

それこそ神と精霊と魔法に溢れていた、統一言語混乱前の時代のモノでも遥かに稀少で……。

(……………う、ん?)

なにかが思考の端に引つ掛かる。いや待て、それが出来る英雄が確か居たような気がする。

……………そうだ居た。確か名前は。

「主ー」

思考に沈みかけていたアレインティアはランサーの鋭い声、に組み立てていた真実に近い過程を瞬く間に霧散させ、弾かれたように顔を上げ　色違いの眼を睜った。

夜の闇よりも尚暗く、星の光すら届かぬ場所で、間桐雁夜は狂おしいまでの感情の赴くままに笑いを漏らしていた。

その形相はまさに異形。隻眼を憎悪に染め上げ血走らせ、色を失った唇は狂喜に吊り上げられている。

長かった。苦痛に耐え忍び、絶望に打ち勝ち、ただひたすら身体を蟲に齧られて過ごしてきた一年間。それが今、ほんの少しだけ報われる。

「遠坂、時臣……………！」

愛したひとの幸せを願い、彼は身を引いた。あの時確かに、葵が恋慕に身を焦がしていたのは時臣だったから。

しかしどうだ、その結果は。どこに、あのひとのしあわせがあるというのだ。

葵は心からの笑顔を失った。凜は悲しみを押し殺して必死に耐えている。

そして、桜は。

「殺せ……………」

舌の上で、憎悪という砂糖の塊が甘くとろける。

そう、彼はこの時のためだけに一年間、生きてきたのだ。

「殺すんだバーサーカー！あのアーチャーを殺し潰せッ！！」

そして、遠坂時臣を。

倉庫街に、漆黒のサーヴァントが顕現した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1279u/>

---

真祖の乙名と聖杯戦争

2011年10月30日01時54分発行